

商学会賞受賞報告

第9期生 竹内 亮介

◆執筆論文の概要

消費者は単一の製品カテゴリ内の多数の広告に露出することによって、広告に対する記憶および評価の水準を減じるといわれている。消費者反応にこのような影響を及ぼす広告効果は「競争的広告効果」と呼ばれ、半世紀以上に亘って研究が蓄積されてきた。「競争的広告効果」に対する抑制力を探る既存研究は数多く存在するものの、それらの大半は広告の定量要因、すなわち、広告量に関する議論にのみ終始し、広告の定性要因、すなわち、広告表現を看過してしまっている。実際、広告表現を考慮する必要性が既存研究によって指摘されているにも拘わらず、広告表現の「競争的広告効果」に対する抑制力を分析した研究は皆無である。本論は、単一の製品カテゴリ内の多数の広告間にみられる差異の程度を表す「弁別性」を、3種類の広告表現手がかり、すなわち、「情緒的手がかり」、「合理的手がかり」、および「発見的手がかり」の観点から検討することによって、この研究課題に取り組む試論である。t検定を行った結果、「情緒的手がかり」の「弁別性」が高い広告は、競合広告数が少ない場合に比して、競合広告数が多い場合の方が、高水準の「再生」および「広告態度」を有する一方、「合理的手がかり」および「発見的手がかり」の「弁別性」が高い広告は、競合広告数が多い場合に比して、競合広告数が少ない場合の方が、高水準の「再生」および「広告態度」を有するということが見出された。

◆執筆後記

正直なところ、当初、商学会賞に挑戦する予定は全くありませんでした。春学期の段階から商学会賞へ挑戦することを決めていた同期生は他に3人いたものの、なんか20,000字の字数制限あるらしいし、卒論と書式ルールが違うところあるらしいし、もしも審査に落ちたら嫌だし、締め切り直前にバタバタするのも面倒臭いし…といった具合に極めて低次元な言い訳をごたごとと並べて、「俺は出さない！」という結論に至っていました。しかし、商学会賞の締め切りが近づくにつれて、あと一步を踏み出さずにいた自分をバカバ



9期インゼミメンバーとマケ論報告会にて（著者は中央）

かしく思うようになりました。この程度の一步さえ踏み出せない人間が、今後、一体何を成すことができるのだろうか。ましてや、来年度から大学院に進学し、将来は研究者・教育者と呼ばれるに相応しい人間になりたいと志しているのに…。こんな感じで自問自答を繰り返した結果、2012年10月の3~4週目頃、僕は商学会賞に挑戦する決意を突然固めたのであります。自分は本当に短絡的な人間です。

と、ここまでは非常に順調な流れだったのですが、10月下旬からメ切的11月6日にかけては、三田論を彷彿とさせる壮絶な日々を過ごすことになりました。

分析作業と論文後半部の執筆を突貫工事で進め、商学会賞のフォーマットに書き換えようとした頃には、小野ゼミ恒例の「普通に寝てたら、どう考えても間に合わない状況」になっていたのです。「まだ小野先生に1度も見ていただけていないのに大丈夫か…自分…」と肝を冷やしたのは言うまでもありません。それでも、ギャーギャー騒がず、状況を打開すべく、ひたむきに努力を重ねるようになれたのは、この2年間の鍛錬の賜物でしょうか。

10期生の三田論や計画的な3人の同期生へのご指導もある中、僕が商学会賞挑戦を直前に決めただけに、小野先生には多大なご迷惑をおかけしたことと思います。小野先生をも「普通に寝てたら、どう考えても間に合わない状況」へと道連れにしてしまったことに対する自責の念は、今後もしばらく消えそうにありませんが、幸運なことに、その借りを返すことのできる機会を僕は他の同期生よりも多く有しています。ですので、どうか小野先生にはそれを楽しみにしていただければ、と生意気にも考えている次第であります。本当に頑張ります。

このように、終始ドタバタとした展開になってしまいましたが、無事に論文を完成させることができ、最終的には、商学会賞受賞という最高の形によって、この挑戦を終えることができました。採択可の3文字を見たときに感じた「あの感覚」を忘れることはないでしょう。唐突ではありますが、この論文に関わってくださったすべての方に、改めてお礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

しかし、これで満足してはいけません。この道の先には、やるべきこと、取り組むべきことが山ほど待っています。果たすべき目標が、夢が、野望があります。今回の挑戦で得たあと一步を踏み出す力とでも言うべき武器を携えて、次なる未来を切り拓いていかねばならないのです。自分が恵まれた環境に身を置けることへの感謝の気持ちも忘れずに。

とは言うものの、再度、「普通に寝てたら、どう考えても間に合わない状況」に陥ることは是非とも回避したいので、まずは、もう少しばかり計画的な人間になることから始める必要があります。



真夏の京都でうなだれる著者と
山口本務代表（著者は左）